

はしがき

私たち日本国民の意識が 70 数年ほど前はどんなものであったか、今こそ振り返ってみる必要があるように思います。そこには「笑えない事実」が横たわっているからです。

- ・生産力にして 20 分の 1 ほどでしかない日本でも勝てると思って、アメリカに戦争を挑んだ。

- ・石油、ゴム、鉄鉱石などの資源が自国に全くないことが分かっているながら、これから侵略する国の資源をあてにして戦争に突入した。

- ・特攻隊そして人間魚雷など、人間の命を爆弾に変えて戦うことを思いついて実行に移した。

- ・アメリカが日本向けに原子爆弾を準備している時に、日本は大きな紙を貼った風船爆弾を気流に乗せてアメリカを攻撃することを真面目に考え、実行した。

- ・補給路が全くないままインド奥地のインパール作戦を強行し、戦わずして将兵数万人の死者を出した。

- ・自国軍の暗号を過信して、変えないまま作戦行動に使用していた。

- ・ドイツと同盟関係にある日本が、ドイツと戦っているソ連を最後の仲介者としてあてにしていた。

- ・国民の誰もが、天皇陛下のためなら死んでもいいと真剣に思っていた。

- ・国の命令で自分の家が強制的に壊されても（私有財産が犯されても）誰も文句を言わずに、それに従った。

- ・雨あられと投下される焼夷弾の炎を、バケツの水とはたきで消そうとしていた。

- ・東京をはじめ各都市が焼け野原になっている現実にも直面しても、政治指導部は戦争終結を誰も口にしなかった。

今日、私たち大方の日本人は誰もが、政治や社会にいくらか不満はあるものの、民主主義を基盤とした合理的な社会システムの下で平穏に暮らしていると思っているはずで

ですから、右に掲げた遠い過去に実際にあった、いくつもの不合理と思われる事例については、政治家であれマスコミ関係者であれ、また高校の社会科の教師や大学教授でさえも、「あれは当時の強権的な政府や軍指導部が国民に強いたものだ」との受け止め方をしているのではないのでしょうか。

しかし、本当にそうでしょうか。私見を許してもらえれば、日本人にはもともと農村共同体的な体質が染み付いていて、異質な意見に対しては、それを無視もしくは排除し、大勢の意見と思われるところに己れの身をおいてそこに安住する……。著者の身にも刷り

込まれているであろう、そんな行動体質が当時の政治指導部から国民の末端にまであったことこそ、不合理も甚だしい、こうした「笑えない事実」を生んだのではないかと。

そして、この先 70 数年後の私たちの子孫もまた、私たちが 70 数年前を振り返ったのと同じ、否もっと屈辱的な事例を今の政治や社会の中に見てしまう……。悲しくも今の日本人の多くがその現実気づいていないだけで。

かつての日本は、その独善的な単独行動により、多くの禍根を私たち国民に残しましたが、今日の状況はそれとは全く異なるもの、つまり、アメリカとの二人三脚、否アメリカに追随した国防政策にどっぷり浸かっていることです。

ここにきて、新型コロナウイルスの世界的流行により、「国防」の状況は大きく変わります。アメリカのコロナウイルスによる死者の数がこの病気の発見から半年たらずの間に 20 万人余、なお毎週 5 0 0 0 人以上出しており、その異様な速さからこのままワクチン開発が間に合わなければ、かつて 15 年間に及んだベトナム戦争によるアメリカ兵の戦死者数 (54 万 8 3 8 3 人) にもしや追いつくのではないかとこの予測が識者の間で広がっています。つまり、「世界の警察官」アメリカの土台がこのウイルス一つで揺らぎだしたことを意味します。

この現実、経済活動を含め過去の人間の歴史が作り上げてきた「国境」に、いともたやすく穴を開けたことにほかなりません。つまり、世界のどの国も「国防」、すなわち「国民の命を守ること」の中身の変更を迫られているということです。

わが国の国防政策が、こうした状況にあつてなお、すでに色あせた感のあるアメリカの軍事戦略に追随したままでいいものかどうか。

むしろ、国民の生活に寄り添い、憲法 9 条の「非戦」の思想に基づいた自衛隊の新たな活躍の場が求められているとも言えます。

本書では、アンデルセンの童話にある「王様は裸だ！」と叫んだ子どもの素直な目と同じ目線で、この日本の「笑えない現実」、すなわち、「日本の国防」を多面的に活写することに努めました。

そして今こそ、70 数年ほど前にあつたと同じ轍を踏まない新しい方策、戦争につながる武器を持たない「丸腰」の国防を、この書を手にしたあなたと一緒に考えていきたいと切に思っております。

2021年1月

著者著す